思フニ、同死ニテ此ノ菴ハ狹ケレバ入ナバ惡カリナム、不入ヌ前ニ鬼ニ走リ向テ切ラムト思テ、大刀ヲ拔テ菴ヨリ踊出テ鬼ニ走リ向テ、鬼ヲフツト切ツレバ、鬼被切テ逆樣ニ倒レヌ、其ノ時ニ男人鄕ノ近キ方樣ヘ走リ逃ル事无限シ、遙ニ遠ク走リ逃テ人鄕ノ有ケルニ走リ入ヌ、人ノ家ノ有ケルニ、和ラ寄テ門脇ニ曲マリ居テ、夜ノ明ルヲ待ツ程心モト无シ、夜明テ後ニ男其ノ鄕ノ人共ニ會テ、然々ノ事ノ有ツレバ、此ク逃テ來レル由ヲ語レバ、鄕ノ人共此レヲ聞テ奇異ト思テ、去來行テ見ムト云テ、若キ男共ノ勇タル數男ヲ具シテ行テ見ケレバ、夜前葬送セシ所ニ墓モ卒都婆モ无シ、火ナドモ不散ズ、只大キナル野猪ヲ切殺シテ置タリ、實ニ奇異キ事无限シ、此レヲ思フニ野猪ノ此ノ男ノ菴ニ入ケルヲ見テ、恐サムト思テ謀タリケル事ニコソ有メレ、益无キ態シテ死タル奴カナ、トゾ皆人云喧ケル、然レバ人離レタラム野中ナムドニハ人少ニテハ不宿マジキ事也ケリ、然テ男ノ京ニ上テ語ケルヲ聞繼テ、此ク語リ傳ヘタルトヤ、

野猪雜載

〔奥州波奈志〕上遠野伊豆

昔富士の御狩には、仁田の四郎、猪にのりしといふよりくふうにて、御山追の度毎に、いつも猪に乘しと云傳ふ、正左衞門けい母は上遠野家より來りし人也、（この伊豆にはまたをいなり）この人のはなしに、伊豆は狐をつかひしならん、あやしきこと有と云しとぞ、手りけんと、猪にのるとのくふうなどあやうきこと也、さるをなるやならずやといふことをとひあはする物有て、思立しこと也と語しとぞ、されば正左衞門もいづなの法習はんとはせしなるべし、八彌若年の頃迄は伊豆も老年にてながらへ有しかば、夜ばなしなどには猪にのることを常に語りて有しとぞ、逃てゆく猪にはのられず、手追に成て人をすくはんとむかひ來る時、人の本にいたりては少しためらふもの也、その時さかさまにとびのる也、猪はかたほねひろくしりのほそきもの故、しり尾にすがりて下はらにあしをからみてをれば、いかなる藪中をくゞるとてもさはらぬもの也、扨おもふまゝく